

# 令和3年度 第4回藤沢型地域包括ケアシステム推進会議 議事要旨

## I. 開催概要

1. 開催日時 2022年（令和4年）3月23日（水）  
午後4時30分～午後6時30分
2. 開催場所 藤沢市役所本庁舎5階 5-3会議室  
本庁舎7階 7-1・7-2会議室

## 3. 出席者

(1) 委員＝17人（敬称略）

・会場出席者

川原田 武 横川 敬久 小路 成明

・オンライン出席者

大野 貞彦 市川 勤 川村 哲 浅見 佳代子 西山 千秋  
小林 邦芳 石井 由佳 澁谷 晴子 多川 友広 秋山 美紀  
吉田 展章 戸高 洋充 山本 智子 伊原 敦

(2) 傍聴者＝1人

## 4. 議題等

1 開会

2 議題（テーマ別部会）

◆テーマ①：地域活動の活性化について【7-2会議室】

<資料1>「地域活動の活性化について」説明資料

参考：地域活動関連リーフレット

◆テーマ②：ACPの普及啓発について【7-1会議室】

<資料2>「ACPの普及啓発について」説明資料

参考：遠藤地区「あなたの人生会議」資料

◆テーマ③：複合的な困りごとに対する支援について【5-3会議室】

<資料3>「複合的な困りごとに対する支援について」説明資料

【各部会共通資料】

<資料4>令和4年2月市議会厚生環境常任委員会 資料

<資料5>令和3年度庁内検討委員会・専門部会等実施状況報告

## II. 会議の概要（議事要旨）

### 1 開会

### 2 議題 テーマ別部会の開催

以下の3つのテーマに対して、グループに分かれて意見交換を行った。

- ・テーマ①「地域活動の活性化について」
- ・テーマ②「ACPの普及について」
- ・テーマ③「複合的な困りごとに対する支援について」

#### <テーマ①「地域活動の活性化について」>

参加者：大野委員、市川委員、川村委員、横川委員、浅見委員、西山委員、  
市社会福祉協議会：倉持参与、村上次長（事務局）  
地域共生社会推進室：玉井室長、浅野主幹、糊澤主任、高松主任（事務局）

～地域活動やボランティア活動に多くの方が参加してもらうために、「こんなことできると、担い手の発掘につながる、理想の仕組み」や「その中でどのように実施可能な取組みつなげるか」について意見交換～

#### 【理想的な取組や考え方（あったらいいな）】

- ただ単純に担い手不足と考えるとターゲットが広く、考えると分かりづらい。しかし、ターゲットを最初から絞るのではなく、全体で考えてから、世代ややりたいことで支援の仕方を考えていくことが大切。
- 市が、介護予防の取組を行っている会社と委託を結び、老人クラブ等の高齢者が多くいる会に協力することで、自然と高齢者が興味を持つことで入会者も増え、担い手の発掘につながるのでは。
- 若い世代（小学生から大学生等）に対して、自分たちが楽しく暮らすにはどのような取組があれば良いかを考える時間を持ってもらう機会を作ること。その考えが地域活動に繋がり、若い世代が地域活動に興味を持ち担い手確保につながるのでは。
- ボランティア団体が今やっていることや、募集していることが、すぐに分かるような、周知の仕組み作りがあるといいのではないかと。広く知ってもらいやすい環境を作り、ボランティアを身近に感じてもらうことが重要。
- 神奈川県「SDGsつながりポイント事業」など、敷居が低く自然に参加できる仕組みを検討できれば。インセンティブを与えるような取組があればいい。また、そのインセンティブが藤沢市に関連付いたことであれば、若い世代や興味を持たない若い世代にも伝わりやすい。
- 地域活動の日程調整や、会計を行政等が協力してくれるとよい。

#### 【うまくいった事例】

- NPO法人ラウレアが日本財団の支援を受け設置した、「あそぶばりノアパーク」や秋葉台公園に設置されたインクルーシブ公園は、障がある子もいない子も分け隔てなく一緒に遊べる公園であり、楽しみながら地域交流できる場である。
- コロナ禍により対面でなかなか会えなくなったが、ZOOM等を使用することが

でき、資料等を事前にメールで送付するなど、ITに強くなることができた。  
○中学生に行政の取組を伝える機会があり、学生に地域活動に関心を持つきっかけづくりができた。また、中学生の視点から学ぶことも多くあった。

#### 【課題・ポイント】

- 担い手確保のための対象を最初から絞るのではなく、全体で考えてから、世代や、やりたいことで支援の仕方を考えていくことが大切。
- 若い世代(大学・高校等)に興味を持ってもらえるように周知活動を進めていき、若い世代の視点が新しいアイデアや、将来の担い手に繋がる。
- 取り込もうとすると逃げられるので、こちらから取り込まれる。
- コロナ禍で、ZOOM等のITを有効活用ができるようになった。
- 神奈川県「SDGsつながりポイント事業」など、敷居が低く自然に参加できる仕組みを検討できれば。それによって地域活動が発展されるのではないかな。
- 高齢者が多く在籍している自治会等に、市が介護予防等を行っている事業所と委託を結び、介護予防の取組をできる仕組みづくりができればいいのではないかな。

#### 【今後の方向性について】

- ①「地域に参加するきっかけ」  
→ポイント制度等のインセンティブについて
- ②「地域に参加した後」  
→既存の団体が活動を継続・発展できるような支援や連携について

#### <テーマ②「ACPの普及啓発について」>

参加者：小林代表、石井委員、澁谷委員、川原田委員、多川委員、秋山委員、  
市社会福祉協議会：(事務局)小野常務理事  
高齢者支援課(事務局)：内田課長  
地域医療推進課(事務局)：林課長補佐  
健康増進課(事務局)：中野課長補佐  
地域共生社会推進室：(事務局)山中室長補佐、石田主査

～行政の現状におけるACPに関する取組について足りない部分を補い、この部会発の企画や成果物をつくることについて意見交換～

#### 【自分らしい生き方】

- 後期高齢者や一人暮らしの高齢者が急増しているが、一方で、アクティブな高齢者も増加傾向にある。
- 日ごろから社会とのつながりを持っているかどうかで、望む最後の形をとれるか大きな影響がある。高齢者になってから、それに気づいても、なかなかつながりを作ることは難しい。若いころからの意識づけが重要。
- 「終活」というと、「終」ばかりがクローズアップされてしまうが、「活」の最後から逆算した残りの人生計画についても、普及啓発するべき。

○ACPのテーマの一つとして、「長寿の人生をどう生きるか？」を掲げてはどうか。

**【人生のしまい方】**

- 「健康づくり」や「フレイル予防」に焦点を当てると、本当に最後の時をどう過ごすかという問題がぼやけてしまう。本当に最後のところをどう考えるかが、本人や家族にとって重要であり、今の施策で、伝えきれてないところではないか。
- ACPは、本人の意思決定を尊重すること。人生を進んでいくうえで、様々なターニングポイントがあり、その都度、様々な選択肢がある。その選択肢を増やす、選択できるうちに選択することを支援する取組を進めてはどうか。
- 片瀬地区で鶴生園の開催した終活の講座の中で、訪問看護師の「看取り」の会は、日ごろ終末期を迎える方々と身近に接しているため、リアリティのある内容であった。
- ゲーム感覚で楽しく最後と向き合うきっかけとして「もしバナゲーム」というカードゲームがあるので、活用してみてもどうか。

**【課題・ポイント】**

- 子どもなどの若い世代から最後の話はしにくい。子どもから親に終活ノートを渡しやすくなるような、多世代に向けた啓発が必要。
- 選択肢を「知る」ことが大事。例えば、在宅で最期を迎えるか、施設で迎えるか、それぞれのメリットやデメリットを知ることができれば、意識も変わってくるのではないか。
- これまで高齢者のACPを中心に考えてきたが、そこから派生する親亡き後の障がい者の課題についても、専門職を招いて考えていきたい。
- ACPの対象となるほとんどの人たちは、なんらかの機関（病院、包括、行政など）が把握をしている。問題は、独居高齢者やそもそも終活を全く考えていない人などの、狭間の人たち。こういった人たちを、ノープランで終末期に陥る前に洗い出してフォローしていく必要があると思う。

### <テーマ③「複合的な困りごとに対する支援について」>

参加者：吉田委員、戸高委員、小路委員、山本委員、伊原委員

地域共生社会推進室：片山主幹、越川室長補佐、佐藤主査（事務局）

～想定ケースをもとに、それぞれの視点でどのように関わるか、またその課題解決のための取組について協議～

**【想定ケース①】**いわゆる「ごみ屋敷」の状態にある世帯に向けた福祉的支援について（前回検討ケース）

- ・祖母、息子、孫娘（小学生）の3人暮らし。地上2階建ての戸建て
- ・孫娘が、学校で「臭いがする」という理由からいじめにあったことを理由に担任の先生が家庭訪問をしたことで、家屋の堆積物を発見した

**【想定ケース②】**ダブルワークで家計を支え、引きこもりの長男を案じる母

- ・母と長男、長女の3人世帯。長男が高校中退し引きこもり状態に。
- ・母は生計維持のためにパートを掛け持ちし、発達障がい診断を受けた長男をケアしつつも将来への不安から精神的に疲弊している。
- ・長女は元気に中学校に通っている。

**【想定ケース③】**認知症の母をケアする精神障がいのある長女

- ・80代の母と40代長女の2人世帯。長女は精神障がいがありながらも、認知症のある母をケアしながら就労していたがコロナ禍で失業。
- ・母の介護や家計のこと、自身の将来のことなど、悩みや不安が大きくなり、精神状態が悪化している。

**【想定ケースから見えてくるもの】**

- （ケース②）長女が思春期にさしかかり、家でのケアラーになる可能性がある。母のお手伝いが長女にとって負担になる可能性がある。
- （ケース②）長男のひきこもり状態を母としてどのようにとらえて、対処するかが課題。母が抱えている課題を誰かに相談できるのか。家族の状態像を探ることから始める。
- （全体として）どこが相談を受け、受けた先でチームを組めるのか、そこがないと、時間が経過して、深刻になってくる。入院・苦情等のきっかけないと介入できないのでは。課題の潜在化につながる。
- いかに早くニーズをキャッチして、チームを作れるかが課題。
- 実際には気づかれていない、埋もれているケースがあり、どうやって支援につなげていくか。そのためにより丁寧に寄り添い、聞き取ることが大事。
- （ケース②教育現場の視点から）子ども、保護者から話を聞き、家庭の支援については、関係機関を紹介することもあるが、このような家庭の場合、役所で申請

に行くこともハードルが高いため、課題を整理して各部門と調整する部門があるとよい。

**【地域で必要な支援のあり方について】**

- ケアを担う家族が休息できる機会の提供（ショートステイなどの利用）。
- 支援を担う人を整理（それぞれがどこまでできるか）。
- ワンストップで困りごとを拾う CSW の役割が後ろ盾となるが、CSW は一人で抱え、判断することがないよう、チームアプローチを意識している。
- 学校現場では、担任がヤングケアラーに関して踏み込むのは難しいのが実情であり、行政とのパイプを太くし、つなぐことがポイントとなる。スクールソーシャルワーカーや支援担当教諭を通じて、CSW が間に入ると、連携しやすい。
- 学校内外の連携が弱く、子どもが困ったとき相談できる文化を作ることが必要。

**【今後の取組について】**

- 藤沢型地域包括ケアが徐々に浸透しているため、今の流れを大切に取組んでいくこと。
- ケアラー支援については、仕組みづくりが必要。誰が支援者のキーになっていくのか、イニシアチブを誰がとるのか。
- 縦割りがあっても、どこまで庁内連携ができるか、各部署でどれだけ浸透していくかが問われている。法や制度に基づく業務を行う中でも、話を聞くことは全職員ができるのではないかと。
- ボランティア相談員のような存在が育成され、専門職をカバーできるとよい。潜在化する困りごとを引き出す仕組みづくりが必要。
- スクールソーシャルワーカーが外部に具体的な相談をするときは、個人情報の関係で保護者の同意が必要となる。
- 相談を受けることがある職種で最低限の技能を持つように、各職場の担当分野以外でも話を聞く姿勢を作っていく必要がある。さらに、専門職のスキルも高める。

**【部会③ 今後の展開について（方向性）】**

- 少人数で検討する部会の特性を生かし、議論を深める。
- これまで検討してきた課題の整理と相談・支援体制に関する長期的なビジョンの文言化。関係機関向け及び市民向けのネットワーク構築、取組の整理。

### 3 閉会

以 上